

張 慧聰 (チョウ エソウ)

中国出身／2018 年度奨学生

日本女子大学 家政学研究科住居専攻修士課程修了

日本女子大学修士課程で住居学を修めた後、プリツカー賞受賞者で世界的に活躍される建築家の坂 茂氏の建築設計事務所で奮闘中の張 慧聰さんにご寄稿いただきました。



建築とは何だろう？という問いに、日本に来た頃はまだ深く考えていませんでした。

中国での大学時代、『連戦連敗』（安藤忠雄著）という本に出会いました。「建築生産」（経済性を重視

する学問）を学んでいた私は、この時初めてデザインに興味を持ちました。安藤さんの作品を見るまでは打ち放しコンクリートは仕上げができない未完成品にしか見えず、まさかこんなにも美しい物だとは思いませんでした。そして「建築は常識を破る」ことに気付きました。

その後日本語を勉強し、ネットで日本のリフォーム番組「大改造!! 劇的ビフォーアフター」を見て、留学の決意をしました。大学院では多世代住宅をテーマに研究を行いました。集合住宅全体は、人間関係を築くコミュニティです。共有空間を大きくすると、住宅の中に小さな経済行為が生まれるようになりました。居職統一により、住民は部屋に住むだけでなく、お互いに助け合い、子育て、教育、介護、自己実現も可能になると考えました。建築は単なる建物ではなく、意図を持つ空間です。その意図は、設計者から与えられたものです。建築は「魂」を持っているのです。

この魂を探し就職活動を行う中で、坂 茂氏に出会いました。初めて坂氏の紙管とカーテン

でできた間仕切りの写真を見たとき、心が震えました。坂氏は講演会『作品づくりと社会貢献の両立をめざして』で「体育館のような広いところに被災した人たちが大勢集められ、間仕切りもなく雑然とした中で寝ているのです。このようなプライバシーのない、人権を無視した避難所の状況を、日本政府は地震がある度にずっと続けているのです。非常に悲惨な状況を目の当たりにし、なんとか間仕切りをつくろうと思って、新潟県中越地震の時も、福岡県西方沖地震の時にもいろいろな試行錯誤をしてきたのですが、やっと今回ひとつのよい解法が見つかりました。」と語っています。紙が建築資材になれるのは不思議なことです。そしてそこまで人のためを考えられることに感動しました。これこそ「魂」を持つ建築だと思うからです。

この「魂」に誘われ、幸運にも坂茂建築設計に入社することが出来ました。初めての仕事はコンペでした。仕事を取れるかどうかはこの1ヶ月の努力次第でした。1枚のパースのために何十枚のアングル図をつくったり、柱一本のために何日も掛けて模型をつくったりと、毎日終電まで仕事をし、充実した1ヶ月でした。コンペ資料を提出し、無事二次審査に入りました。いい結果がでるようにと、毎日ドキドキしていました。7月5日は二次審査のプレゼンテーションの日、驚くべきことが起こりました。坂氏は熊本豪雨災害を支援するため、プレゼンテーションに行かず、熊本に行ったのです。当日、大分県立美術館で開催されていた「坂茂建築展」の最終日も出席せず、ずっと熊本県で活動を続

けられました。坂氏は自分の仕事よりも災害支援を選びました。これは坂氏の「建築とは何だろう」への答えでした。

7月30日、熊本県人吉市の人吉スポーツパレスに間仕切り385ユニットを設置しました。（写真下）。入社以来、毎日、間仕切りのカーテン用の布を畳み、紙管を倉庫まで運び、それらは全て熊本へ送り出しました。費用は支援金（NPO法人ボランタリー・アーキテクツ・ネットワークより受付）で負担し、不足分は自払いです。このやり甲斐に、仕事を取れなかった悔しさはとっくに雲消霧散しました。

